

# 標準ハンガリー語における連合複数

言語学・応用言語学専門分野

2018(平成 30) 年入学

小林 宙夢

2022(令和 4) 年 1 月提出

## 要旨

本論文では、標準ハンガリー語(以下、ハンガリー語)における連合複数の使用条件に焦点を当てて記述を行うことを目的としている。先行研究である Moravcsik (2003) は、通言語的な連合複数の使用条件に関して言及し、一部その例としてハンガリー語の用例を用いている。それらに基づきハンガリー語に関して、①敵対 ②空間・時間的制限 ③中核指示対象という三つの観点からそれぞれ調査を行った。結果として、①に関しては有生性階層における固有名詞以外の階層で用いられず、②に関しては、I. 同時性 II. 起点結束性 III. 着点結束性という観点からの一般化を行うことができ、③に関しては、先行研究と概ね一致する結果であったが、先行研究では述べられていない非人間名詞を擬人化する例が得られた。また、連合複数がまとめることができる対象 (Associates) に関して、名詞句階層による一般化を行った。

# 目次

1	はじめに	1
2	対象とする言語	2
2.1	言語の概要	2
2.2	ハンガリー語の音素論と音韻規則	3
2.2.1	母音調和	3
3	連合複数とは何か	4
4	ハンガリー語の連合複数	5
4.1	ハンガリー語の複数に関する先行研究	5
4.2	ハンガリー語の連合複数の論点	9
5	調査	9
5.1	調査概要	9
5.2	敵対 (Moravcsik 2003)	10
5.3	空間的・時間的性質	12
5.4	中核指示対象	20
5.4.1	連合複数の接続する名詞の種類	20
5.4.2	連合複数のまとめられる範囲	21
5.5	擬人化	23
6	終わりに	24
	グロス一覧	27
	参照文献	27

# 1 はじめに

本研究の目的は、標準ハンガリー語(以下、ハンガリー語)における連合複数標識の使用条件を記述することである。連合複数とは、名詞X(典型的には人間名詞、特に固有名詞や親族名詞)に対して、接辞、接語、語を接続して形成され、"Xとそれに関係する人々"というような意味を表わすものである(Daniel and Moravcsik 2013)。例えば日本語の「太郎たち」にみられるように、指示対象(=太郎およびその仲間複数人)が均質な複数ではなく、中心的な指示対象とその仲間を示すような複数を指す。(1)に連合複数を持つ言語の例を挙げる。なお、以降引用するグロスの記述は先行研究に従うものとする。

- (1) a. ハンガリー語の連合複数 (Moravcsik 2003: 469)

*Péter-ék*

Peter-ASPL

‘Peter and his family or friends or associates’

- b. ハンガリー語の累加複数 (Daniel and Moravcsik 2013:(3))

*toll-ak*

pen-PL

‘pens’

また、連合複数と対立する概念として、累加複数がある。累加複数は、名詞に対して接続し、加法的、かつ集合の内部が均質である複数である。(Daniel and Moravcsik 2013)

- (2) a. 英語

*boy-s*

boy-ADD.PL

‘boys’

- b. フランス語

*bateau-x*

ship-ADD.PL

‘ships’

先に挙げた言語では、それぞれ連合の意味を持つ複数と累加の意味を持つ複数で形式を使いわけていたが、言語によっては二つの意を同一の形式を用いて表わす。

- (3) 日本語

- a. 連合複数の場合

*Tanaka-tati*

Tanaka-ASPL

‘Tanaka and his family or friends or associates’

b. 累加複数の場合

*sensei-tati*

teacher-ADD.PL

‘teachers’

(4) ヒシュカリヤナ語 (Derbyshire 1985: 132-133)

a. 連合複数

*Waraka komo*

Waraka PL

‘Waraka and those accompanying him’

b. 累加複数

*hawana komo*

visitor PL

‘visitors’

本研究では、連合複数と累加複数を区別する言語として言語類型論や数に関する理論研究で長く研究されてきたハンガリー語に焦点を当て、これまでの研究で指摘してきた特徴を再検討し、以下の3点を論じる。

まず、連合複数によってまとめられる集合の性質に関して、Moravcsik (2003) は敵対関係にある者同士を連合複数でまとめることができないと指摘しているが、本研究ではそれに対する反証を行う。

次に、連合複数によってまとめられる集合に関して、Moravcsik (2003) は空間的・概念的に一貫したグループを指示する必要があるが、時間的に行動を共にする必要はないと指摘していた。この点に関して、同時性、起点結束性、着点結束性の3変数を導入し、より詳細な記述を行う。

最後に、連合複数が接続する対象である中核指示対象に対して、Corbett (2000) の有生性階層に従って詳細な調査を行い、擬人化における新規例文の提示を行う。

本研究の構成は以下の通りである。まず2章で本研究の対象であるハンガリー語の言語情報に関して概観する。次に3章では類型的な観点から連合複数の定義を観察し、4章でハンガリー語における複数、ハンガリー語における連合複数と順を追って先行研究を概観した後、それらの問題点を示す。次に5章で筆者が行った調査の結果について記述を行い、6章で結論と今後の課題を述べる。

## 2 対象とする言語

### 2.1 言語の概要

本研究で対象とするハンガリー語は、ウラル語族、フィン・ウゴル語派のウゴル諸語に属しており、ハンガリー共和国とその周辺諸国(ルーマニア・ユーゴスラビア・チェコスロバキアなど)で話されている。話者数は1,500万人、ラテンアルファベットを用い、基本語順はSVO/SOVが併用される。(以上、早稲田・徳永 1992: 361による)



図1 ハンガリー共和国

## 2.2 ハンガリー語の音素論と音韻規則

本節では、本稿に関わる範囲でハンガリー語の音韻論を概観する。なお、以下の記述と本稿で採用するハンガリー語の表記は全て早稻田・徳永(1992)に基づく。

ハンガリー語の音素は、子音音素 25 個 (p/b, t/d, c/ɟ, k/g, f/v, s/z, ʃ/ʒ, ʃ/ʒ, h, ts/dz, tʃ/dʒ, m, n, ɲ, l, r), 母音音素 14 個 (i/i:, y/y:, e/e:, ə/ə:, ε/ε:, ɑ/ɑ:, ɔ/o:, u/u:) である。

また、ハンガリー語には特徴的な現象として、母音調和の現象が存在している。

### 2.2.1 母音調和

ハンガリー語の母音は前舌 (e, é, ö, ő, ü, ũ, i, í) と後舌 (a, á, o, ó, u, ú) の二つのグループに分類され、原則的には同一語内において共存しない。そのため、それぞれの母音に対応する接尾辞が存在している。例えば、(5a, 5b) に見るように、格標示では前舌専用の接尾辞、後舌専用の接尾辞の二種類が存在しており、それぞれ使いわけられている。ただし、前舌非円唇母音 (i, í, e, é) に関しては、中立母音と呼ばれ接辞や接語に生じる際には前舌母音、後舌母音の両者と共に存する。

- (5) a. 前舌専用の与格"-nek"

*tűz-nek*

fire-DAT

‘to fire’

(Dunbar-Hester 2003:66 (30a))

- b. 後舌専用の与格"-nak"

*haz-nak*

house-DAT

‘to house’

(Dunbar-Hester2003: 67 (30b))

ただし、外来語や混合語など一部の単語においては二種類の母音が共存することがある。その場合は、(6a, 6b) で見るよう にその語の最後の母音に対応して母音調和が起こる。

- (6) a. 混合語における方向格 (最後が前舌)

*Budapest-re*

Budapest-ALL

‘to Budapest’

- b. 混合語における方向格 (最後が後舌)

*Visegrád-ra*

Visegrad-ALL

‘to Visegrad’

### 3 連合複数とは何か

言語類型論の観点から、連合複数標示に関して言及している論文としては、Moravcsik (2003) が挙げられる。Moravcsik(2003: 470) はまず、各言語における連合複数の形式が二種類に分類されると指摘している。

#### 1. X + 代名詞複数形

この形式では、複数指示の集団を代表する指示対象 (中核指示対象、すなわち *focal referent*; Moravcsik 2003: 470) の名詞 X に代名詞の複数形を接続させる。例としては中国語が挙げられる。

(e.g.) 张三他们(Zhangsan-3SG-PL, ‘Zhangsan and others’ )

#### 2. X + 複数マーカー

この形式では、中核指示対象の名詞 X に複数マーカーを接続させて連合複数を構成する。“一人以上の X” という形式を用いることで、“X と X に関連する人 (々)” という意味を表わす。この例には日本語やハンガリー語などが含まれる。

(e.g.) 太郎-たち (Taroo-PL, ‘Taroo and others’ )

次に Moravcsik (2003) は通言語的な連合複数の特徴として以下の三点を挙げている。

一点目は、複数形式であるため、構成要素が单一ではない複数を表わすということである。例えば、日本語において、太郎たち (Taroo-tati)(Taroo-ASPL) という表現を用いた際には、太郎とその他の人々という意味を含有しているため、複数の人間が指し示されている。

二点目は、空間的・概念的にまとまった集団を表わすということである。累加の意味を表わす複数形式に関しては、完全に繋がりのない個人に関して言及するよりも、何かしらの繋がりがある集団について言及する傾向があるに過ぎないが、連合複数においては、必須条件となる。しかしながら、共時的に行動をともにする必要はないと Moravcsik (2003) は指摘している。

三点目は、中核指示対象は単数かつ定の人間名詞でなければならないということである。人間名詞の中でどれだけ連合複数を用いることができるかということは、言語によって異なる。例えば、中央アラスカユピック語では、中核指示対象が固有名詞だけに限られるが、中央ポモ語では、固有名詞もしくは(定である)親族名詞、不定の代名詞や疑問代名詞においても用いることができるとされている。(Corbett and Mithun 1996, Corbett 2000: 106)

[Moravcsik 2003: 470]

さらに、連合複数標識が接続する対象である中核指示対象に関して、より詳しい記述があり、Corbett (2000: 56)において述べられている有生性階層 (Animacy Hierarchy) に従って、表中のある地点で連合複数を使用できる場合には、それより左に位置している全ての地点において連合複数を利用できるとしている。

First	Second	Third	Kin	Other	Other	Inanimate
Person	Person	Person	Nouns	Human	Animate	Nouns
Pronoun	Pronoun	Pronoun			Noun	Noun

[Moravcsik 2003: 482]

## 4 ハンガリー語の連合複数

以下では、まず、4.1 節においてハンガリー語の複数標識に関する先行研究を参照する。次に 4.2 節においてハンガリー語の連合複数に関する先行研究を概観する。最後に 4.3 節にてそれらの問題点を示す。

### 4.1 ハンガリー語の複数に関する先行研究

ハンガリー語の主な先行研究である Kenesei et al. (2002) では、ハンガリー語には主に三種類の複数形式が存在するとしている。

(7) a. 累加の意味を表わす複数形式

*könyv-ek*  
book-PL  
'books'  
(Kenesei et al. 2002: 254 (412))

b. 所有かつ累加の意味を表わす複数形式

*Attila autó-i*

Attila car-POSS.3.SG.PL

‘Attila's cars’

(Kenesei et al. 2002: 254 (413))

c. 連合の意味を表わす複数形式

*Péter-ék*

Peter-COL

‘Peter and his friend(s)/family’

(Kenesei et al. 2002: 254 (414))

(7b) で示した複数形式は、所有かつ累加の意味を表わすものである。この形式は、所有対象に対して接続し、累加の意味を表わす。接続対象は非人間名詞に限らず人間名詞に対しても接続することがある。

(8) a. 人間名詞に対する所有累加複数形式

*Tanar-i-m*

teacher-POSS.PL-1.POSS

‘my teachers’

また、累加の意味を表わす複数形式と所有の意味を表わす複数形式の両者にはそれぞれ母音調和が起り、異形態が存在する。

累加専用形式である-k に関して、母音で終わる語に対しては、基本的には語幹末に-k を接続させるが、語末が a/e であった場合にはそれぞれの母音を長母音に変えて-k を接続させる。

(9) a. *olló-k*

scissor-PL

‘scissors’

(Kenesei et al. 2002: 256)

b. *almá-k*

apple-PL

‘apples’

(Kenesei et al. 2002: 256)

c. *körté-k*

pear-PL

‘pears’

(Kenesei et al. 2002: 256)

また、子音で終わる語に関しては、後舌母音語 (a/o/u) には-ok、前舌母音語 (i/e/ö/ü) には-ek を接続させる。前舌母音語の中でも最後の子音の直前の母音が前舌円唇母音 (ö/ü) である単語には-ök

を接続させる。

- (10) a. *város-ok*  
house-ADD.PL  
'houses'  
(Kenesei et al. 2002: 256)
- b. *gyerek-ek*  
child-ADD.PL  
'children'  
(Kenesei et al. 2002: 256)
- c. *gyümölcs-ök*  
fruit-ADD.PL  
'fruits'  
(Kenesei et al. 2002: 256)

所有の意味を表わす複数形式に関しては、基本的には語幹末に-iを接続させるが、後舌母音語で母音で終わる語幹には-jaiを、子音で終わる語幹には-aiを接続させる。前舌母音語で母音で終わる語には-jeiを、子音で終わる語には-eiを接続させる(グロスは筆者による)。

- (11) a. *hajó-i-m*  
ship-POSS.PL-1.POSS  
'my ships'  
(Balogh and Keszler 2000: 189)
- b. *pad-jai-m*  
bench-POSS.PL-1.POSS  
'my benches'  
(Balogh and Keszler 2000: 189)
- c. *ház-ai-m*  
house-POSS.PL-1.POSS  
'my houses'  
(Balogh and Keszler 2000: 189)
- d. *kert-jei-m*  
garden-POSS.PL-1.POSS  
'my bicycles'  
(Balogh and Keszler 2000: 189)
- e. *vödr-ei-m*  
bucket-POSS.PL-1.POSS  
'my buckets'  
(Balogh and Keszler 2000: 185)

連合複数の-ék に関しては、用いられている母音が中立母音である「é」であるため、母音調和の現象が起きず、常に-ék の形式を用いる。

- (12) a. *Péter-ék*

Peter-ASPL

‘Peter and his associates/family’

- b. *tanár-om-ék*

teacher-1.POSS-ASPL

‘my teacher and his family/associates’

- c. *Natália-ék*

Natalia-ASPL

‘Natalia and her associates/family’

次に、M. Korchmáros (1995) では、-ék に関して、「異質な」複数形を表現し、特定の人物とその家族・友人・仲間を示すものであるとしている。

- (13) a. *tanító-ék*

teacher-ASPL

‘teacher and his/her associates’

(M. Korchmáros 1995: 298)

また、累加の複数に関しては無生物・生物名詞の両者に対して使用できる一方で、連合複数は人間を表わす名詞にしか用いることができないとしている。加えて、連合複数である-ék は通常の複数と互いに除外的である一方で、所有の複数である-i とは共存することができることが示されている。なお、グロスの英語訳と本文訳は筆者によるものである。

- (14) a. *szomszéd + ok + é + i*

neighbour + PL + POSS + POSS.PL

‘the things of neighbours’

- b. *szomszéd + ék + é + i*

neighbour + ??? + POSS + POSS.PL

‘the things of neighbour and others’

- c. *szomszéd + ai + m + é + i*

neighbour + POSS.PL + 1.POSS + POSS + POSS.PL

‘the things of my neighbours’

- d. *szomszéd + ai + m + ék + é + i*

neighbour + POSS.PL + 1.POSS + ??? + POSS + POSS.PL

‘the things of my neighbours and others’

[M. Korchmáros 1995: 301]

## 4.2 ハンガリー語の連合複数の論点

本節では、先に概観した先行研究の問題点に加え調査を行う上で生じたハンガリー語の連合複数の論点を整理する。

一点目は、敵対の状況に関するものである。Moravcsik (2003) には、ハンガリー語において「Péter-ék」が Peter とその敵を表わすことができないとの指摘がある。しかしながら、論文中で明確な状況設定のなされた例文提示が行われていない。また、単に「敵対」という状況は曖昧であるため、より詳細な状況設定を用いて調査を行う必要がある。また、「敵対」に関連して社会的に対立している二集団に対して連合複数を用いることができるかについても調査する。例えば、「店員と客」のような、役割的に対立関係にあるが必ずしも敵対関係にないものについても検証する必要がある。

二点目は、空間的・時間的な集団という概念に関するものである。Moravcsik (2003) は、連合複数が用いられる集団に関して、空間的・概念的にまとまった集団である必要がある一方で、時間的には行動を共にする必要はないと述べている。しかし、それぞれに関して、"Peter and his associates arrived together.", "Peter and his associates arrived at different times." という意味をもつ例文のみが提示されており、詳細な状況設定のなされた例文提示がされていない。この点に関して、空間的に同一/別々、時間的に同一/別々の変数を掛け合わせて調査を行う。

三点目は、連合複数が接続する中核指示対象に関してである。M. Korchmáros (1995) は、人間を表わす名詞に対して接続すると述べている。しかし、この点について筆者が行った予備調査の結果、人間以外にも接続することがわかっている。例えば以下の例文では、人間以外の動物名詞に関して連合複数接辞が接続している。

(15) macska-ék

cat-ASPL

‘cat and others’

しかしこの点に関しては、詳細な状況設定・例文提示が行えていないため、より具体的な設定を行った調査を実施する必要がある。

## 5 調査

本章では、4.2節で示した3つの論点、すなわち以下5.2~5.4節に示す3点について、筆者の新規の調査による再検討を行う。

### 5.1 調査概要

標準ハンガリー語における連合複数の使用の実際を調べるために、ハンガリー語話者二名に対して、オンラインチャットツール上での聞き取り調査を行った。調査にご協力いただいたのは、ハンガリー ブダペストに在住の若年層話者 Z 氏 (20歳女性) と同じくハンガリー ブダペストに在

住の中年層話者 M 氏 (35 歳男性) である。二名共に外住歴はない。

## 5.2 敵対 (Moravcsik 2003)

はじめに、先行研究の中で示されていた連合複数の性質のうち敵対という概念に関して調査を行った。先に指摘した通り Moravcsik (2003) では連合複数を用いて「ペーテルとその敵」をまとめて表わすことができないという記述があった。しかし、例文提示がなされておらず、かつ詳細な状況設定も行われていなかった。そのため今回の調査では敵対という概念を喧嘩をしている場面に読み替えて確認を行った。

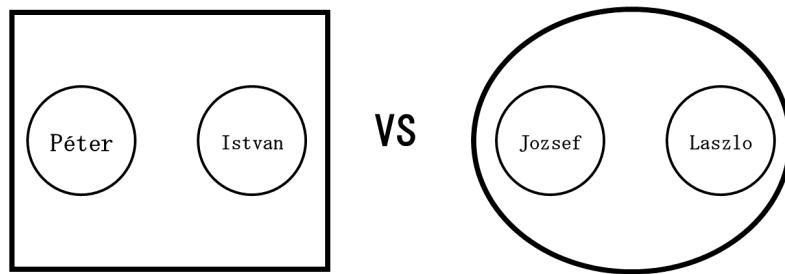


図2 敵対の状況設定

図2で示したように四人の人物の名前をあげ、左右のグループの内部では仲が良く、グループ間ではそれぞれ仲が悪いという状況設定を行った。

結果としては、話者二名どちらの回答においても、喧嘩をしている複数名を「Péter-ék」とまとめて表現することが可能であった。

- (16) Peter と Istvan, Jozsef と Laszlo の仲がそれぞれ良く、互いのグループを憎みあっている  
Péter-ék      harcol-t-ak.  
Peter-ASPL fight-PST-PL  
'Peter and others have fought.'

加えて、(16)に関して、「Péter-ék」がどのような構成員を含有することができるかということに関して調査を行った。例文を提示した後に、五つの選択肢を提示しどの選択肢の状況を想像するかということに関して伺ったところ、結果として中核指示対象を含んでいないため非文になる状況以外の四つの選択肢において、容認度の差は見られないということがわかった。

\* 「Peter-ék」がどの構成員を含有することができるか

- (i) Peter と Istvan
- (ii) Peter と Jozsef
- (iii) Peter と Laszlo
- (iv) Jozsef と Laszlo
- (v) Peter と Istvan と Jozsef と Laszlo

(iv) を除く全ての選択肢において容認され、どの状況設定においても容認度の差はないという回答が得られた。

また、同じく敵対の概念に関して、固有名詞以外の人間名詞に関して調査を行った。

(17) では、親族名詞である「testvér」(兄/弟/姉/妹)を中心指示対象として用いて調査を行った。また、(18) は職業名詞である「boltos」(店員)を用いて調査を行った。

結果として、親族名詞・職業名詞においてはそれぞれ敵対の状況設定では用いることができなかった。

(17) 家族が喧嘩している状況設定

- a. *\*Testvér-em-ék veszeked-nek.*  
brother-1.POSS-ASPL fight-3.PL  
'My brother and others are fighting.'
- b. *Testvér-ei-m veszeked-nek.*  
brother-POSS.PL-1.POSS fight-3.PL  
'My brothers are fighting.'

(18) 店を襲った強盗と店員が争っている状況設定

- a. *\*A boltos-ék harcol-nak.*  
ART.DEF shopkeeper-ASPL fight-3.PL  
'Shopkeeper and others are fighting.'
- b. *A boltos-ok és a tolvaj-ok harcol-nak.*  
ART.DEF shopkeeper-ADD.PL and ART.DEF thief-ADD.PL fight-3.PL  
'Shopkeepers and thieves are fighting.'

結果として、Moravcsik (2003) で述べられていた敵対の状況設定において、固有名詞に関しては連合複数を用いることができたが、それ以外の人間名詞に関しては用いることができなかつた。Moravcsik (2003) の記述の全体的な趣旨としては、本調査による結果と同種のものであったが、固有名詞に関して、敵対の状況では連合複数を用いることができないとされていた。その点に関して、本調査の結果として連合複数を用いることができたことが相違点として挙げられる。

### 5.3 空間的・時間的性質

次に、空間的・時間的な性質に関して示す。Moravcsik (2003) はハンガリー語を含む連合複数の性質として、空間的・概念的に一貫したグループを形成することが必須であるという点を挙げていた。しかし同時に、時間的に行動をともにする必要はないという記述があった。そこで、まず空間的な一貫性に関して調査を行った。

空間的な一貫性に関しては、次の例文を用いて調査を行った。状況設定としては、文化祭の準備を班に分かれて行っており、それぞれの班のリーダーが集まり会議を行っているというものである。その中で、その場にいない班員をリーダーの名前でまとめることができるかということに関して調査を行った。

結果として、空間として別の場所にいる班のメンバーをも指して連合複数標識を用いることができた。



図3 空間的な一貫性

(19) *Péter csapatá-nak kell elkészít-eni-e a dekoráció-t,*

Peter team-GEN must prepare-INF-3 ART.DEF decoration-ACC

*Péter-ék fog-ják csinál-ni a dekoráció-t.*

Peter-ASPL will-3.PL.PRES.IND do-INF ART.DEF decoration-ACC

‘Peter's team must prepare the decoration, Peter and his teammate will do the decoration.’

この例文では、一見空間的には別々の場所に存在しているチームメンバーに対しても-ékを用いることができているため、空間的な一貫性は必要条件ではないと考察することができる。しかし、状況設定として Peter とそのチームメイトが飾り付けを行う未来の時点では行動を共にすることとなっている。このことが影響し、-ék の使用が容認されている可能性が考えられるため、空間的・時

間的な一貫性についてそれぞれパターンを作成し、網羅的な調査を行った。

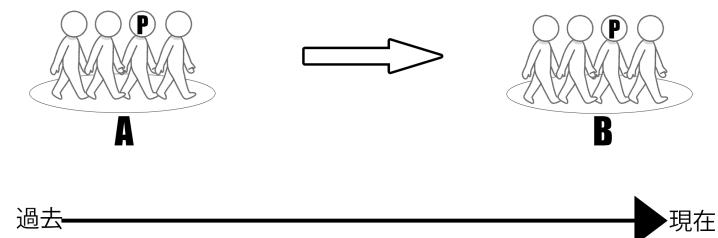
まず、空間的な一貫性のパターンに対して状況設定を行い、調査を行ったところ、下記の(20)、(21)では-ékを用いることができるが、(22)、(23)では用いることができないことが分かった。

(20) 同じ場所から同じ場所へ同時に向かう場合

*Péterék elmen-t-ek ugyan-ar-ról a hely-ről ugyan-ak-kor vala-hova.*

Peter-ASPL go-PST-PL same-that-ABL ART.DEF space-ABL same-that-time some-where

‘Peter and others went from same place at the same time to somewhere.’

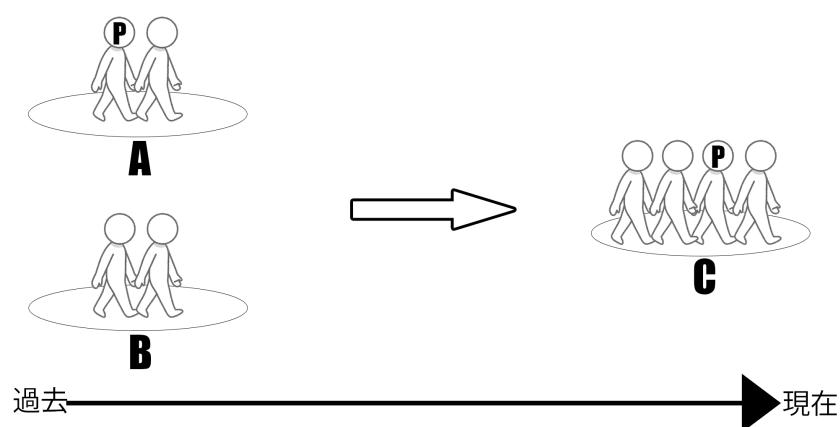


(21) 別の場所から同じ場所へ同時に向かう場合

*Péter-ék már elindul-t-ak.*

Peter-ASPL already set.off-PST-PL

‘Peter and his friends has already set off.’



(22) 同じ場所から別の場所に同時に到着する場合

- a. \*Péter-ék    ugyan-ak-kor    indul-t-ak    el    vala-hova    (külon).  
Peter-ASPL same-that-time set.off-PST-PL off some-where separately  
'All three of them set off separately.'
- b. Mind-hárman ugyan-ak-kor    indul-t-ak    el    vala-hova    (külon).  
all-three    same-that-time set.off-PST-PL off some-where separately  
'All three of them set off separately.'

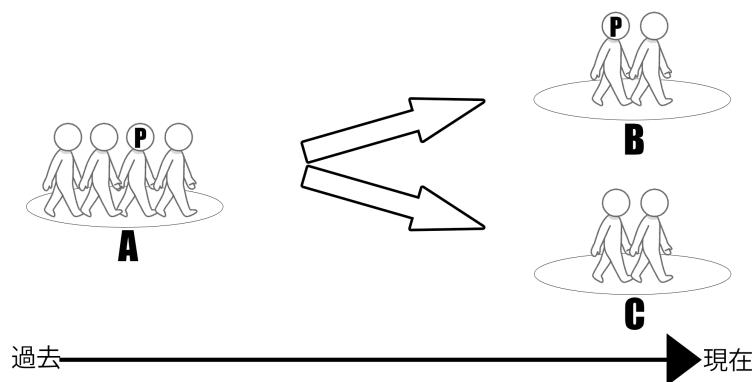


図6 同じ場所 → 別の場所：同時

(23) 別の場所から別の場所に同時に到着する場合

- a. \*Péter-ék    ugyan-ak-kor    indul-t-ak    el    vala-hova    (külon).  
Peter-ASPL same-that-time set.off-PST-PL off some-where (separately)  
'All of many set off to somewhere (separately).'
- b. Mind-annyian ugyan-ak-kor    indul-t-ak    el    vala-hova    (külon).  
all-so.many    same-that-time set.off-PST-PL off some-where (separately)  
'All of many set off to somewhere (separately).'

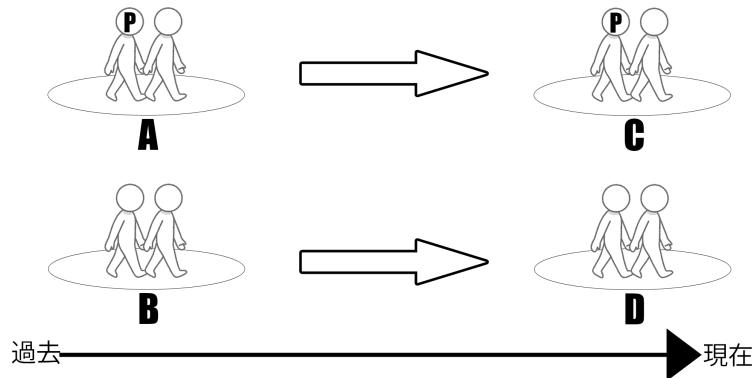


図7 別の場所 → 別の場所：同時

このことから、-ék を用いる際には、少なくとも動作の終了時に同じ空間にいる必要があることがわかる。

表1 空間的な一貫性 (同時に出発・到着)

		到着時	
		同一の場所	別の場所
出	同一の場所	○	×
	別の場所	○	×
時			

また、話者の内省によれば、同じ場所で待ち合わせをするはずであったが、別々の場所に到着してしまった場合には、以下の文が容認されるということであった。

(24) Péter-ék    két külön    hely-re        men-t-ek    vél-etlen-ül.

Peter-ASPL two separate location-ALL go-PST-PL think-less-ADV

‘The two of Peter and the other accidentally went to separate location.’

加えて、それぞれ別々の場所から別々の場所にたどり着く予定であったが、誤って同じ場所に到着してしまった場合に関しても容認される。

(25) a. 別々の場所に到着する予定であったが、同じ場所に到着した場合

b. Péter-ék    összefut-ott-ak.

Peter-ASPL run.into-PST-PL

‘Peter and his associates run into each other.’

次に時間的な一貫性の変数を組み合わせて調査を行った。結果として、到着時に同じ場所にいる必要があることがわかった。

(26) 同じ場所から同じ場所に別々に到着する場合

- a. *Péter-ék összetalálkoz-t-ak a vég-cél-juk-on.*  
Peter-ASPL meet-PST-PL ART.DEF end-goal-3PL.POSS-LOC  
'Peter and others meet at their final destination.'
- b. *Péter és a több-i-ek gyülekez-t-ek*  
Peter and ART.DEF more-POSS.PL-PL gather-PST-PL  
'Peter and others gathered.'

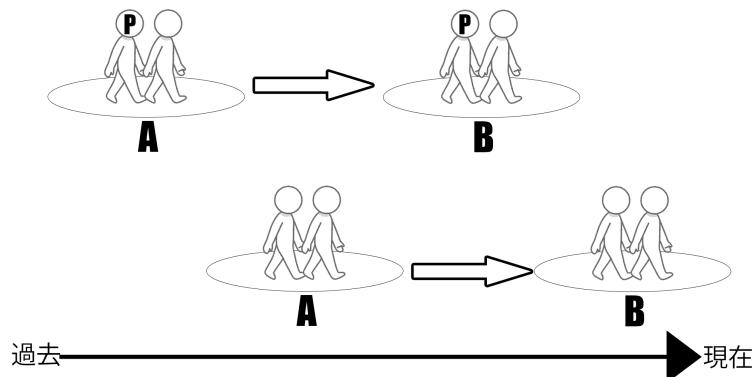


図8 同じ場所 → 同じ場所：別々

(27) 同じ場所から別の場所に別々に到着する場合

- \**Péter-ék külön érkeze-t-ek.*  
Peter-ASPL separately arrive-PST-PL  
'Peter and others arrived separately.'

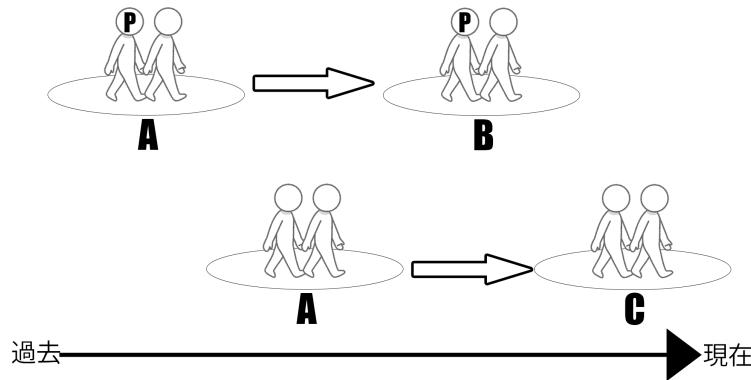


図9 同じ場所 → 別の場所：別々

(28) 別々の場所から同じ場所に別々に到着する場合

- a. \*Peter-ék összegyűt-ek.

Peter-ASPL gather-1.SG

‘Peter and others have gathered.’

- b. Péter és a barát-ai összegyűt-ek.

Péter and ART.DEF friend-POSS.PL gather-1.SG

‘Peter and his friends gather together.’

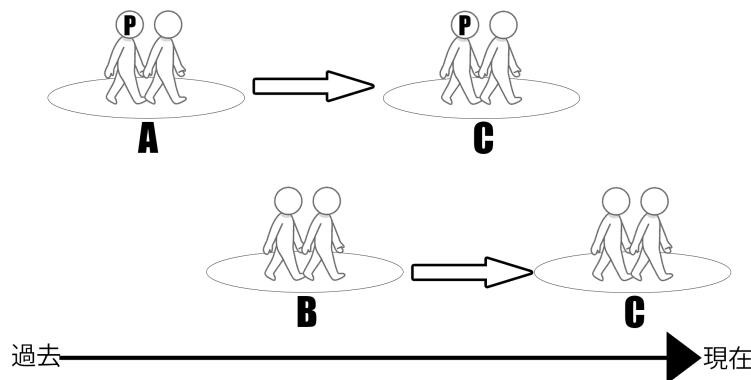


図10 別の場所 → 同じ場所：別々

ただし、(28a)の例文に関しては、特定の条件下で容認されるということが分かった。

(29) 別の場所から同時に到着することを想定していたが、別々に到着した場合

Péter-ék külön érkeze-t-ek.

Peter-ASPL separately arrive-PST-PL

‘Peter and others arrived separately.’

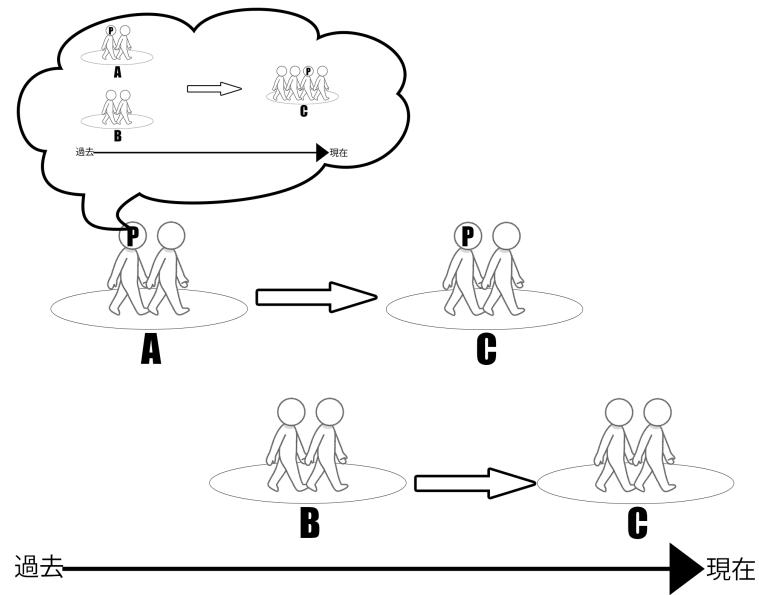


図11 別の場所 → 同じ場所：想定

また (29) に関して、二人ずつの分かれたグループに比べて、単身ずつ到着した場合には容認度が向上する。

(30) 同じ場所に同じ時間に到着することを想定していたが、四人が別々に到着した場合

*Péter-ék      mind külön      érkeze-t-ek.*

Peter-ASPL each separately arrive-PST-PL

‘Péter and his associates arrived separately.’

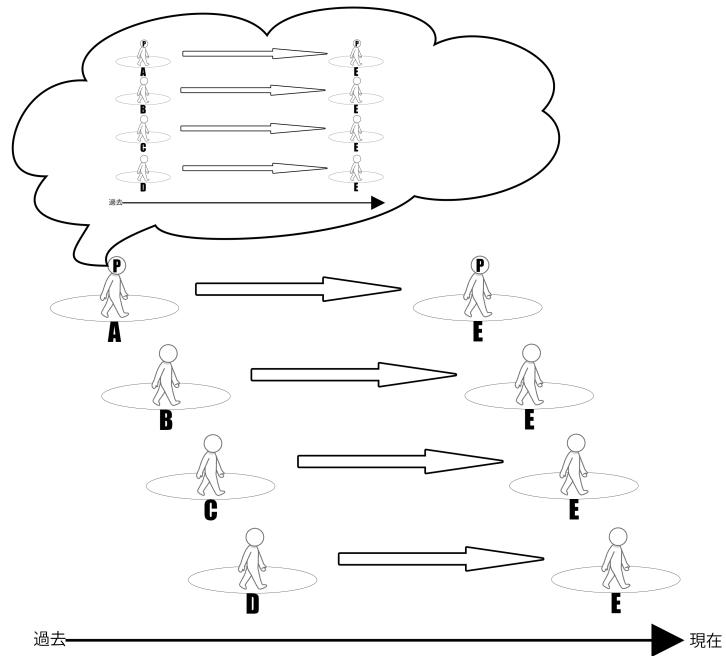


図12 別の場所 → 同じ場所：想定, 単身

(31) 別の場所から同じ場所へたどり着こうとしたが, 誤って別々の場所に 10 分遅れて到着した場合

- a. Péter-ék teljesen elkerül-t-ék egymást.  
 Peter-ASPL completely avoid-PST-3PL each.other  
 'Peter others avoided each other completely.'

これらの結果をまとめると以下のようになる。

表2 時間的な一貫性(別々に出発・到着)

		到着時	
		同一の場所	別の場所
出	同一の場所	○	×
	別の場所	×	×
時			

表1, 表2より, 第一に, 動作を記述する時点で集団が同一の場所にいる必要があることがわかる。第二に, (29), (30), (31)より, 現実に起こっている事象とは別に, その集団が同じ空間に到着しようとする意志を持っている場合に, 容認度が向上するということがわかる。

ここで, 出発時に動作を同一の空間で行っているかを「起点結束性」, 到着時に動作を同一の空

間で行っているかを「終点結束性」，動作を同一のタイミングで行っているかを「同時性」と名付け，それぞれの変数に対して例文の容認可否をまとめると以下のようになる。

表3 時間的・空間的一貫性のまとめ

同時性	起点結束性	着点結束性	容認可否
+	+	+	○
+	-	+	○
-	+	+	○
+	+	-	×
-	+	-	×
-	-	+	×
-	-	-	×

これを一般化すると，①必要条件として，着点結束性が必要となり，②同時性，もしくは起点結束性のいずれかが満たされる必要がある，ということが言える。

## 5.4 中核指示対象

### 5.4.1 連合複数の接続する名詞の種類

連合複数を表わす接辞が接続する中核指示対象 (focal referent) に関して，先行研究である M. Korchmáros (1995) は，人を意味する名詞か，擬人化した名詞にしか用いることしかできないと指摘していた。そこで，有生性階層 (Corbett 2000) に従い，①固有名詞，②親族名詞，③人間名詞，④動物名詞，⑤無生物名詞に関してそれぞれが中核指示対象になることができるかということについて調査を行った。

結果として，M. Korchmáros (1995) の指摘通り，①から③まで，すなわち人間を指示対象とする名詞までは問題なく連合複数を用いることができた。しかし，後述するように，④動物名詞については容認度に搖れが見られることもわかった。まず，①，②，③，⑤の例を示す。

#### (32) a. 固有名詞 (人名)

*Anná-ék      vesz-ik      meg a      kenyér-et      az      ebéd-re.*  
 Anna-ASPL buy-3.PL and ART.DEF bread-ACC ART.DEF lunch-ALL  
 ‘Annas and some other people will buy the bread for lunch.’

#### b. 親族名詞

*Anya-m-ék      sétál-nak.*  
 mother-1.POSS-ASPL walk-3.PL  
 ‘My mother and others are walking.’

#### c. 人間名詞

*Tanár úr-ék arra sétál-t-ak az osztály-társ-ai-m-mal.*  
 teacher HON-ASPL there walk-PST-PL ART.DEF class-mate-POSS.PL-1POSS-with  
 ‘The teachers were walking along with my classmates.’

d. 無生物名詞

*\*Az asztal-ék*  
 ART.DEF desk-ASPL  
 ‘The desk and others’

動物名詞に関しては、連合複数を形成できるもの(愛玩動物)とできないもの(それ以外)があることがわかった。

(33) の例文に関しては、野良犬・野良猫に対しては、-ék の使用は容認されず「犬と猫が喧嘩している」というような分析的な表現を用いる。(34) の例文に関しては、愛玩動物としての犬・猫に対して連合複数を用いることができるか調査を行った。結果としては話者によって容認度に揺れが見られる。

(33) 野良猫と野良犬が喧嘩している状況

- a. *\*A macská-ék harcol-nak.*  
 ART.DEF cat-ASPL fight-3.PL  
 ‘The cat and others have fought.’
- b. *Kóbor macska és kóbor kutya harcol-nek.*  
 stray cat and stray dog fight-3.PL  
 ‘Stray cat and stray dog are fighting.’

(34) 飼い犬と飼い猫が喧嘩している状況

- a. *?A macská-ék játsza-nak.*  
 ART.DEF cat-ASPL play-3.PL  
 ‘The cat and others are flolicking.’
- b. *A kutya és a macska játsza-nak.*  
 ART.DEF dog and ART.DEF cat play-3.PL  
 ‘The cat and dog are flolicking.’

#### 5.4.2 連合複数のまとめられる範囲

連合複数の類型論的な先行研究である Moravcsik (2003) では、連合複数の Asscociates に関して以下のような一般化を提示している。

The associate(s) are also definite human individuals roughly of the same status as the focal referent, chosen according to the following preference scales (G-2):

	(a)	Human	Animate
	(b)	Family Relations	Friendship, Shared Activities Incidental Association

[Moravcsik 2003: 492]

この一般化の中では、連合複数がまとめる対象である *Associates* は、定の人間名詞であり、かつ (a) のスケールにおいて中核指示対象とおおよそ同じ階層に位置づけられるものであり、中核指示対象と *Associates* の関係は、(b) のスケールに位置づけられるものであるとしている。また、文献中で言及されている *Associates* は、基本的に中核指示対象と有生性階層の同一の階層に位置づけられるもの、もしくは下位に属しているものであり、それよりも上位に位置づけられているものを *Associates* として参照するような例は見られない。

しかし、今回調査を行った例文の中で、有生性階層における愛玩動物で、文意としては上位である存在をまとめることができるような例が確認できた。

(35) で示した例文は、*Bodri* という名前の犬とその家族に会いにいくという文脈で得られた例文である。

(35) *Moglátogat-om Bodri-ék-at.*

visit-1.SG Bodri-ASPL-ACC

‘I’m going to see Bodri and others.’

「*Bodri and others*」には、*Bodri*(犬の名前)に加えその飼い主である (Michael) を含んでいる。この例文に関しては、容認されるものの基本的には Michael に接続させる方が自然であるとの回答が得られた。

(36) *Moglátogat-om Michael-ék-at.*

visit-1.SG Michael-ASPL-ACC

‘I’m going to see Michael and others.’

また、飼い主の素性が判明しておらず、首輪に書かれた住所を見てそこに *Bodri* を連れていくという例文においても、-ék を用いることができる事がわかった。

(37) *Moglátogat-om Bodri-ék-at.*

visit-1.SG Bodri-ASPL-ACC

‘I’m going to see Bodri and owners.’

しかし、中核指示対象を「犬」という生物名詞に対して接続させた際には、容認されない。

- (38)\**Moglátogat-om a kutyá-ék-at.*  
 visit-1.SG ART.DEF dog-ASPL-ACC  
 'I'm going to see the dog and owners.'

この例文に関しては、文意としては犬という有生性階層における動物名詞に対して連合複数が用いられているが、形式的には有生性階層の上位に位置している固有名詞に対して接続している。

表4 Animacy Hierarchy (Corbett 2001: 56)

1st person > 2nd person > 3rd person > kin > human > animate > inanimate  
 pronouns pronouns

つまり、このことから、連合複数の Associates に関しては、Corbett (2000) における有生性階層ではなく Dixon (1979) における名詞句階層に従い選択が行われていると分析することができる。

表5 Noun Phrase Hierarchy (Dixon 1979: 85)

1st person > 2nd person > 3rd person > Proper nouns > Human > Animate > Inanimate  
 pronoun pronoun pronouns nouns

## 5.5 擬人化

次に、擬人化に関して、調査を行った。擬人化の用法に関する話者の内省としては基本的には通常の文脈では用いづらく、物語や詩などで用いられる表現であるという回答であった。

- (39) a.\**Trombitá-ék jól játsza-nak.*  
 trumpet-ASPL well play-3PL  
 'Trumpet and others play well.'  
 b. *Trombitá-s-ék jól játsza-nak.*  
 trumpet-AGNR-ASPL well play-3PL  
 'The player of trumpet and others plays well.'

ただ、物語などにおいてキャラクターが擬人化され、人間のように振舞っている際には、生物名詞に対して-ék を用いることができる。

- (40) 猫が擬人化されたアニメ「Macskafogó」を想像した状況  
 A *macská-ék vereked-nek.*  
 ART.DEF cat-ASPL fight-3.PL  
 'The cat and others fought.'

愛玩動物以外においても同様に連合複数の使用が容認される。

(41) *A szöcské-ék sétál-nak.*

ART.DEF grasshopper-ASPL walk-3.PL

‘The grasshopper and others are walking.’

(42) 「ブレーメンの音楽隊」でロバと犬と猫と鶏が歩いている状況

*A szamár-ék Brémá-ba men-nek.*

ART.DEF donkey-ASPL Bremen-ILL go-3.PL

‘The donkey and others go to Bremen.’

(43) *A katicá-ék csemegé-je*

ART.DEF ladybird-ASPL delicacy-3.PL.POSS

‘the ladybirds' delicacy’

## 6 終わりに

本調査により得られた結果をまとめます。

本調査では、主に先行研究で述べられていた①敵対、②時間的・空間的性質 ③中核指示対象に関して述べた。①敵対に関しては、先行研究である Moravcsik (2003)において述べられていた「ペーテルとその敵」をまとめることができないという記述からより詳細な調査を行い、結果として、固有名詞においては、集団の内部構造に関わらず-ék を用いることができる事がわかった。しかし他の人間名詞においては、敵対の状況においては用いることができなかった。

②空間的・時間的性質に関して、先行研究では時間的に行動を共にする必要はなく、空間的には、まとまったグループを指し示さなければならないという記述があった。しかし、例文提示がなされていなかったため、この点に関して変数を設定して調査を行ったところ、その集団が言及される際に空間的にまとまったグループを表わす必要があり、時間的にはほとんどの場合行動を共にする必要があることがわかった。

③中核指示対象に関して、先行研究の中では人間名詞に対してのみ接続するという記述があったが、結果としては、一部人間名詞以外に対しても接続することができる用法が確認できた。

また、本調査を行う上で、先行研究の中では見られないような用法が確認できた。本章では、換喻とみられる用法に関して述べる。換喻 (metonymy) とは、「二つのものや概念の近接性や関連性に基づき、一方のものや概念を用いてもう一方のものや概念を表わす比喩的表現」である。(仲本 2012)

仲本 (2012) は、メトニミーの例として、「鍋が煮える」のような文での、「鍋」という語が「中の具」のことを指しているということを挙げている。また、その二つの事物は" 物理的に近い距離" にあり、二つの概念が連想によって関連付けられるものであるとしている。

この点に関して、連合複数表現を用いることができるかどうかということに関して調査を行った。結果として、ハンガリー語において、換喻に対して連合複数を用いる用法が確認できた。先行研究である Moravcsik (2003) や M. Korchmáros (1995) では、連合複数標識である-ék が接続するのは、人間もしくは、人間を表わす名詞であるという記述があった。しかし、以下の例は、形式的には人

間名詞以外の名詞に対して連合複数標識が接続している。

- (44) *A nagy-orr-ú-ék sétál-nak.*  
ART.DEF large-nose-ADJ-ASPL walk-3PL  
'The person with big nose and others are walking.'

それぞれの例文は、形式としては、「眼鏡」ないしは「大きな鼻」という無生物名詞に対して連合複数標識の-ék が接続しているものである。意味的にはどちらも人間を表わすが、形式的には非人間名詞に関して接続している例である。例文中に含まれている接辞「es」「ú」は、Rounds (2001) によると形容詞化接辞であることが分かっている。

- (45) a. *név*  
name  
'name'  
b. *nev-es professzor*  
name-ADJ professor  
'famous professor'

[Rounds 2001: 219]

- (46) a. *kert*  
garden  
'garden'  
b. *kert-es ház*  
garden-ADJ house  
'house with garden'

[Rounds 2001: 219]

- (47) a. *fekete haj*  
black hair  
'black hair'  
b. *fekete haj-ú lány*  
black hair-ADJ girl  
'a girl with black hair'

[Rounds 2001: 222]

- (48) a. *kék szem*  
blue eye  
'blue eyes'

- b. *kék szem-ű kisfiú*  
 blue eye-ADJ boy  
 'blue-eyed boy'

[Rounds 2001: 222]

また、(44)に示した例文以外に関しても様々なものに対して、接続することがわかっている。

- (49) a. *A szemüveg-es-ék sétál-nak.*  
 ART.DEF glass-ADJ-ASPL walk-3.PL  
 'The person with glass and others are walking.'

ただし、形容詞に直接連合複数接辞を接続する場合は容認されるものの使用されず、分析的な用法を用いる。

- (50) a. *?Az magas-ék sétál-nak.*  
 ART.DEF tall-ASPL walk-3.PL  
 'The tall person and others are walking.'  
 b. *A magas ember és a barát-ai sétál-nak.*  
 ART.DEF tall person and ART.DEF friend-POSS.PL walk-3.PL  
 'The tall person and friends are walking.'

また、名詞に関して、形容詞化接辞を挿入しない場合は、容認されない。

- (51) a. *A nagy-orr-ú-ék sétál-nak.*  
 ART.DEF large-nose-ADJ-ASPL walk-3.PL  
 'The person with big nose and others are walking.'  
 b. *\*A nagy-orr-∅-ék sétál-nak.*  
 ART.DEF large-nose-∅-ASPL walk-3.PL  
 'The person with big nose and others are walking.'

また、先の例においては、身体的な外見や特徴によって中核指示対象を表現していたが、(52)のようにその人物が所属している集団によって連合複数を形成することができる。

- (52) a. *Toyotá-ék jó autó-k-at gyárta-nak.*  
 Toyota-ASPL good car-PL-ACC make-3.PL  
 'Toyota(people at Toyota) manufactures good cars.'  
 b. *Az Apple-ék jó okostelefon-ok-at gyárta-nak.*  
 ART.DEF Apple-ASPL good smartphone-PL-ACC make-3.PL  
 'Apple(people at Apple) manufactures good smartphones.'

(52)に関しては、トヨタやAppleという会社名に対して連合複数標識が用いられている。この点

に関して、話者の内省としては会社名を擬人化しているようなイメージであるということであった。この換喻に対して連合複数接辞が接続している用法に関しては今後の課題とする。

## グロス一覧

1	1 人称
3	3 人称
ABL	奪格
ACC	対格
ADD	累加
ADV	副詞化
ADJ	形容詞化
AGNR	行為者名詞化
ALL	向格
ART	冠詞
ASPL	連合複数
COL	集合名詞
DAT	与格
DEF	定
GEN	属格
HON	敬称
ILL	入格
IND	直接法
INDEF	不定
INF	連用
LOC	場所格
PL	複数
POSS	所有
PRES	現在
PST	過去
SG	単数

## 参照文献

Balogh, J. and B. Keszler (2001) *Magyar grammatika*. Nemzeti Tankönyvkiadó, 183-208. URL: <https://books.google.co.jp/books?id=GuUYAQAAIAAJ>.

- Corbett, Greville G. (2000) *Number*. Cambridge Textbooks in Linguistics. Cambridge University Press.
- Corbett, Greville G. and Marianne Mithun (1996) Associative forms in a typology of number systems: evidence from Yup'ik. *Linguistics*, 32: 1-17.
- Daniel, Michael and Edith Moravcsik (2013) The Associative Plural. In: Dryer, Matthew S. and Martin Haspelmath (eds.) *The World Atlas of Language Structures Online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, URL: <https://wals.info/chapter/36>.
- Dixon, Robert M. W. (1979) Ergativity. *Language*, 55: 59-138.
- Dunbar-Hester, Anna (2002) Hungarian Vowel Harmony. Bryn Mawr and Swarthmore Colleges Linguistics and Languages, Senior Thesis.
- Kenesei, I., R.M. Vago, and A. Fenyvesi (2002) *Hungarian*. Descriptive Grammars. Taylor & Francis, 254-256.
- M. Korchmáros, Valéria (1995) Az -ék: többesjel!. *Acta Universitatis Szegediensis : sectio ethnographica et linguistica néprajz és nyelvtudomány*, 35: 295-308.
- Moravcsik, Edith A. (2003) A semantic analysis of associative plurals. *Studies in Language. International Journal sponsored by the Foundation “Foundations of Language”*, 27(3): 469-503.
- Rounds, C. (2001) *Hungarian: An Essential Grammar*. Essential grammar. Routledge, URL: <https://books.google.co.jp/books?id=JacDGqk7ZsEC>.
- 仲本康一郎 (2012) 「メトニミー再考」『山梨大学教育人間科学部紀要 = 山梨大学教育人間科学部紀要』, (13): 302-320, URL : <https://ci.nii.ac.jp/naid/120006804600/>.
- 早稻田みか・徳永康元 (1992) 「ハンガリー語」『言語学大辞典第三巻世界言語編』, 157: 361-371.

## 謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々に大変お世話になりました。心より感謝いたします。特に主査教員としてご教授いただきました下地理則先生には、深く感謝申し上げます。日中夜問わず様々なアドバイスをいただき、行き詰った際には救いの手を差し伸べてくださいました。また、未知の日本人の研究に興味を持ってくださいり、お声がけいただいた話者の方々にも感謝申し上げます。返信が遅くなったときでも、なかなか話者の方の意を解せなかつた際にも懇切丁寧にご対応いただきました。そして、講義・演習等で大変お世話になりました久保智之先生、上山あゆみ先生、太田真理先生にも深く感謝しております。言語学・応用言語学研究室の先輩方には、ふとした疑問に対しても丁寧に対応していただき、有意義なコメントを多くいただきました。締め切り前に夜を明かしながら論文を執筆した同期にも大変お世話になりました。様々な方々からのご意見等をいただくことで論文をより良くすることができました。心より感謝申し上げます。最後になりますが、ここまで学生生活を支えてくれた家族に感謝いたします。